

プラトンの美のアイデア

The idea of beauty in Plato's dialogues

今 井 直 重

(1) 美 と 調 和

プラトンがゴルギアス (Gorgias, 483-376 B.C.) の美の定義についてのべているところによると、すべてのものは何らかの有用なるもの (*ὠφέλεια*) であるがゆえに美であるのである。何らかの有用なるものは、われわれにとって善きものであるからである。しかしプラトンにおいては、さらにギリシア的なもの、すなわち、美わしきものは善きものであり、善きものは美わしきものであるという思想、すなわち、美即善という、いわゆるカロカガティア (*καλοκάγαθία, καλὸς καὶ ἀγαθία*) の思想が流れている。

カロカガティア、すなわち、美にして善なることが、また善にして美なることである。ここでいうところの美にして善なることは決して肉体的な美なることをのみ意味するものでないことはいうまでもないことである。ギリシア的にいえば、美と善という二つの語の結びつくことのできる場合はつぎのごときものである。その一つは、ある人が善であり、有能であり、且つその人の仕事美しくある場合であり、他はある人が肉体的に美しくあり、そしてその人の行為が人格的によくある場合である。そのいずれの場合においても、美しいことと、善なることとは同一の人格について結合されているのである。美にして善なるものが必然的に結合するためには、肉体の美しさと精神、すなわち、魂の美しさとが結びつかなければならない。カロカガティアの思想のうちには、美わしき魂、すなわち、精神美の要求が主体的に存在しているのである。道徳的な精神の状態や行為について、それが美しいといわれることができるのである。すなわち、美わしい魂は善であり、善き魂は美である。よいこと (*eú*) は善

と美とをその中に含み、そしてそれは、これらのものの結合であるというよりも未だ両者の分たれざる未分の状態においてあるのである。それは色でも形でも声でもなく、人の追求すべきところのもの (ἐπιτηδεύματα) である。それは道徳的 (moralisch) というよりもヘーゲルの言葉でいえば道義的 (sittlich) のものである。それは秩序 (κόσμος) であり、規則正しいものであり、その柔かで、つつましく、行儀よく、見る目に美わしき行為を意味する。それは人の見る目に快く美しいものである。それは自然的で衝動の烈しいものであるよりも人倫的で理知の静けさであり、勇敢であるよりも沈着であり、狡智であるよりも賢明であり、強情であるよりも慎み深くあることをその本質とするものである。^②

大宇宙 (κόσμος) は自然と精神とを含んで、一般に正しく秩序的なるものをあらわしている。それは美であり、善であり、両者の統一をあらわしている。美なるものは自然的なるものをあらわすが、善なるものは精神的なるものをあらわしている。かくて宇宙は自然と精神とを結合するものであって、美と善とを結合し、美にして善なるものを形づくるところのものである。それは秩序 (τάξις) であり、秩序づけること (ταξιόω) である。宇宙がよく統一されて規則正しい運行をなすのもひとえにこのコスモス (κόσμος) の原理に支配されているからである。形体の美は主として尺度 (μέτρον) によって、メτροンの中にあること (ἔυμετρον)、すなわち、メτροンに適うこと (συμμετρία) によって可能になるのである。メτροンは測定の基準になるものであるが、それはまず広さ、深さ、長さ等の数量の関係をあらわすものである。一般に事物の形態は一定の数的関係にあることによって美わしいのであるが、しかもそれはある一定の目的的関連において、時機に適したものと (τὸ κατῶν)、適宜なるものと (τὸ πρίπον)、宜しきを得たるものと (τὸ προσήκον) であることを要する。数量の関係を計ることは人間の能力によって可能なことであるが、何が目的に適合するか、何が最も時宜的であるか、何が最も宜しきを得たるものであるかということは神のよく計り得るところである。プロタゴラス (Protagoras, 500-430 B.C.) のいうごとく、人間が万物の尺度ではなく、万物の真の尺度は神それ自身なのである。神それ自身において、美なるものの創造者を見出すことができる。また神

は人間にとって何が最も目的に関して宜しきかを計る尺度でもあるのである。何がわれわれにとって最も宜しきものであるかは、ある程度までは人間によっても推察することは可能であるが、しかし、正確に何が人間にとって最善であるかを知ることができるのは神のみであるということが出来る。われわれが善しとするところのことが時として禍をもたらし、われわれが悪しとするところのことがしばしば目的に照らして善いということはわれわれの日常においてよく経験するところである。時宜に適ったもの、目的に適合するもの、宜しきを得たるものはわれわれにとって有用であり、善きものであるのみでなく、見る眼に美しく、心に気持よく、快適なるものである^③。

プラトンにおいては、美はまず形態の美からはじまり、あるいは肉体の美、あるいは色彩の美、あるいは調和の美、あるいは音声の美としてあらわれ、いわゆる感性 (Sinnlichkeit, αἴσθησις) の美として顕現する。これらの美がわれわれにとって美しく快感を与えるのは、それらが、それぞれに、美しい肉体や形態や色彩や音声であるがゆえであるのではなく、それらの肉体、形態、色彩が調和的 (μέθρως) であり、よく均斉がとれている (συμμετρία) からである。調和と均斉こそ美の本質であり、それがまた善の原理でもある^④。

われわれにとって美わしきものは調和と均斉のとれたものである。美はわれわれの心のうちに生ずる性質であり、調和と均斉は、その事物の本性による (εἰς φύσιν) ところの事物そのものの性質である。また形や色彩が美であるのは、それらが調和と均斉とを具有するがためである。しかし、この両者は単に形態に関するものの美のみについて見られるものではなく、徳や知においても認められるところのものである。しかし、また調和と均整とは精神的なるものの領域に属するものである。雑多のうちに統一を見出すものは精神であり、また混雑のうちに調整を作り出すのも精神である。すなわち、精神なくしては事物の調和と均斉は得られないのである。精神のはたらきのある限り、雑多は統一され、混雑は調整され、雑多はいつまでも雑多としてとどまることが許されないのである。それゆえに、形態の美から精神の美へと移らしめるものはこの調和 (ἁρμονία) と均整 (συμμετρία) である。また形態と精神を通じて事物を美ならしめるものは調和と均斉であるということが出来る。すなわち、調和均斉にお

いてあること (*ἕμμετρία*) と調和均斉に適うこと (*συμμετρία*) とは精神のはたらきであるがゆえに、精神的なるものは美のうちにおいてより高い地位を占めるものである^⑤。

(2) 美 と 快 楽

まず最初、プラトンは、すべてのギリシア人が考えたごとくに、美はわれわれの感性 (*Sinnlichkeit*, *αἴσθησις*) を通じてわれわれのうちに快感を与えるものであると考えていたのであるが、次第に発展して、形と色と音響等を通じてわれわれの心にシムメトリア (*συμμετρία*) を与えるものが美であると考えようになった。彼は、最初は美はわれわれに快感を与える限りにおいて、あらゆるものにあるとしていたのであるが、次第に美が快感と同一でないことを論ずるようになった。すなわち、快楽が善でないごとくに快感そのものは美ではない。すなわち、快感と善とは峻別されねばならない。というのは、善は美であり、美は善である (*κάλλος καὶ ἀγαθός*)。快楽は快感であり、快感は快楽である。美はむしろコスモス (*κόσμος*) であると考えようになった。ゴルギアス篇 (*Gorgias*) において、プラトンはつぎのごとくのべている。「哲人のいうところによると、秩序、節制 (*σωφροσύνη*) および正義 (*δικαιοσύνη*) は神と人との結合である。これがコスモスである。コスモスは調和、統一である。一般には宇宙のことをコスモスと称するが、それはまた秩序 (*τάξις*)、調和 (*ἀρμονία*) であって、無秩序、無調和ではない。」^⑥

美はそれが人間に与えるところの快感のために美とされるのではない。美なるものは必ず快感を伴い、快楽をもたらすものであるが、快楽をもたらすものが必ずしもすべて美であるということとはできない。すなわち、換言すれば、美はそれが快感を与えるがゆえに美であるのではなく、美なるがゆえに快感をもたらすのである。美は単なる概念ではなくして、それは具体的に顕現するものであるがゆえに、美の享受は必然的に快感を伴うのである。しかし、それがために美が快感のために美であり、また美はそれ自体快楽であると結論することはできない。ピレボス (*Philebos*) 篇において、プラトンは善と快楽との関係について、さらに善と美との関係について論じているが、それによると、歓楽

(*ἡδονή*)、快樂、喜悅 (*εὐφραίνεω*) およびこれらに類似する感覚はすべてわれわれにとって善きものである。しかし、ソクラテス (Sokrates, 469-399 B. C.) においてはこれらのものは必ずしも善ではなかった。知恵 (*σοφία*)、理知 (*λόγος*) およびこれらに類似する真正なる臆見 (*δόξα ἀληθής*) 等こそ、いやしくもそれらのものを享有し得るところの人々にとっては快樂よりも遥かに善きものであり、人間の欲求すべきものなのである。^⑦

プラトンはさらに善が種々の分子の混和 (*φύρεω*) せるものであることを論じて、その混和せるものの中に美の要素が含まれていることをのべている。すなわち、宇宙のこと、人生のこと、人間のこと、すべては種々なる要素の混和せるものである。これらの混和物が、もしその要素の相互の間における尺度や均斉を欠くときは、その要素においても、それらの混和物においても、必ず常に不美のものであって、それらのものは快感をもたらす混和物ではなくして、不快を与える混濁物 (*χάος*) にすぎないのである。尺度と均斉 (*συμμετρία*) はコスモスのうちにおいて、すべてのものに美しくあらわれ、それらをよくするものである。それは宇宙の美であり、徳である。美と真理と均斉はこれらのものが合一して混和し、これらの混和が善と美の原因をつくることになるのである。^⑧

つぎにプラトンは善の種々の段階について論じている。善のうちには種々の段階の要素が混和しているのである。そして美はこれらの混和要素の中核をなすものであることを明らかにしている。快樂は混和物の第一要素でも第二要素でもない。尺度 (*μέτρον*)、中庸 (*μέσσην*)、適度 (*σώφρων*) 等が第一要素といわれるものであって、これらは永久性 (*ἄει χρόνος*) を有するものである。つぎに第二級の混和要素として均斉 (*συμμετρία*)、完全 (*τέλειος*)、充足 (*ἄδην*) 等の美の一族のものが含まれる。さらに第三級の混和の要素として知恵 (*σοφία*) があげられる。第四級の要素として学問 (*μάθησις*)、技術 (*τέχνη*)、真正なる臆見 (*δόξα ἀληθής*) が加えられる。これらのものは快樂よりもさらに善に親近なるものである。第五の要素には魂そのものの純粋なる快樂が含まれる。^⑨

以上のごとくにしてピレボスにおいて、プラトンは快樂は善でないように、快樂は美とも同一のものでないことを明らかにしている。初期の考え方は別と

して、プラトンにおいては、美とは主として形体美、感性の美と考えていたギリシアの一般人に対して精神的なる美が中心となっている。もちろん、美を論ずるにあたっては形態、色彩、音声の美についてのべているのであるが、それは単なる形態、色彩、音声ではなく、調和をもつ限りにおいての形態の美であり、均斉を保っている限りにおいての色彩の美である。そしてこれらのもののシムメトリア(συμμετρία)の美は精神的なるものでなければならない。また類似的の、エムメトリア(ἑμμετρία)の美も精神的でなければ成立し得ないものであるからである。ここに精神的とは多のうちに一者を、混和のうちに統一(συνφωνία)を、混濁のうちに純粋なるもの(καθαρότης)をもたらすところのものをいうのである。^⑩

しかし美は快感であるということを否定するものではない。もちろん美は必ずしも感性的なものではないが、それは純粋なる快感であるということを否定するものでもない。美なる快感は不純なる快感、すなわち、すぐに不快によってとりかえられるような快感ではなく、それは純粋なる、全く苦痛から解放された快感である。ある快樂は少しも快樂でないのに快樂であるかのごとくに感じさせるし、また他の快樂は大きく且つ無限であるかのように見えるが、実は苦痛を交えたものである。しかし、快樂のうちには少しの不快もなく、その満足の感じが全く苦痛を伴わないで、ただ悅樂(ἡδονή)を与えるところの快樂がある。それが真実の快樂^⑪であって、それは美のうちに含まれるものであり、美と同類のものである。

プラトンはピレボスにおいて、多くの人々が考えているような意味において形の美をいわんとしているのではない。たとえば、動物の美とか風景の美とか芸術的作品の美とかのごとき意味においていわんとしているのではない。そうではなくして、ロゴス的にいっているのである。直線とか円とかまたはこれらを材料にしてできた円鑿や物指や定規によってつくられた面や球のことをいっているのである。それらは他の美のごとくに相対的なる美ではなく、むしろそれらは永遠にそれ自体においてある美であり、それはそれ自身の美であって、他の美との比較を絶したものである。またこれと同じようなそれ自体において美しい色があり、さらに柔和にして清澄であり、純粋なる調べを出す音声も相

対的に美しいのではなく、これらはそれ自体において美しいのであって、それらには固有のある種の快さが伴っているのである。¹²

前述せるとく、均斉、美、真理を快楽と個性との関係において、善の混和の要素を五つの段階に分つてのべ、そのうちの第五の混和要素として苦痛の伴わない快楽、すなわち、魂自身に属する純粹なる快楽がのべられている。美に伴うところの快楽は全くかくのごとき純粹なる快楽でなければならぬのである。快楽には二つの種類があるのであって、美に伴うところの快楽は、やがては苦痛を伴いきたるところの肉体的の快楽ではなくして、それは永遠に純粹なる快楽でなければならぬのである。

プラトンは美について、美そのものとある他のもののために美なるものとを區別して、美そのもの、それ自ら美なるもの、絶對的に美なるものを、美のアイデアとして、アイデア論の最終的なものとしてのべている。ピレボス篇において、美のアイデアは、他の美のごとく相對的な美ではなく、永遠にそれ自ら美なるものであるとのべている。そこでは美なるものは、一般のギリシア人の考えていたような、またプラトンの初期の作品において、たとえばゴルギアス篇において見られるような、快感によって規定されるようなものではなく、それ自らによって、それ自体において規定されるべきものなのである。もちろん、美が快感によって規定されるということは絶對的ではないにしても、快感の美の規定における役割は相当に大なるものが認められるのである。しかしピレボス篇においては、快感は美に随伴するものではあるけれども、それが美の規定であるということはできないのである。快感をもたらずがゆえに美であるのではなく、それ自らが美であるがために快感が伴われてくるのであるとの考え方は、ピレボス篇における美論はゴルギアス篇における美論の発展した思想であることができる。またその快感についても、快感とはいわゆる感覺的快感ではなく、純粹なる快感であることを論じている。この純粹なる快感こそ美の一つの混和物を形成するものである。¹³

美そのもの、美のアイデアがプラトンにおいて明確にされたのはパイドン篇においてである。パイドンにおいてプラトンはつぎのごとくのべている。哲人は肉体を尊ばず、その魂は肉体を脱出して独りであらんことを欲するのである。

それは、魂のみでなければとらえられないものがある。それは絶対美や絶対善である。これらは肉眼をもって見ることはできない。単にこれらのものだけでなく絶対の大、絶対の健康、絶対の強力等についても同様である。これらのものの実体 (οὐσία) は肉体上の器官によっては知覚し得ないものである。否むしろこれらのものの真相に近づかんとすれば、最もよく知性 (νοῦς) をはたらかして、その思考するところのものの本体 (οὐσία) の最も正確なる概念 (νόημα) を得ることに努めることによって得られるのである。知性のみをもってすべての事物に向かい、その思考中は視覚その他の感覚 (αἰσθησις) 毫もこれを思考のうちに混入せしめることなく、知性自体の明瞭さをもって光とし、かくしてすべての事物の探究をなすものは、よくこれらの事物の純粹なる知識に達することができるのである。眼、耳、その他の身体の諸感覚は、すべて真理 (ἀλήθεια) および知識 (ἐπιστήμη) を得ることにおいて、精神 (Ψυχή) を汚染し攪乱するものであるから、これを脱却した人でない限りは真実の知識に達することができない。これは驚くべき真理である。¹⁴

すべて美しいものは、美そのものによって美しいのである。美は何かのゆえに、また他の何ものかのために美であるのではなく、それ自らに、その自体性において規定されることによって美しいのである。そこには多くの美しいものがあるのではなく、美しい多くの事物のうちに普遍的に見出されるところの一つのものがあって、この一つのものがこれらの多くの美しいものをして美しくしているのである。この一つのものが美のアイデア (τὸ κάλλος) なのである。

(3) 美 と 愛

プラトンはパイドロス篇において美と愛の関係についてのべている。視覚は肉体の感官中最も透徹力を有するものである。もちろん知恵は視覚をもって見ることはできないのであるが、愛らしい形象は視覚をもって捉えることができる。その愛らしさは人の心をひきつけることができる。この愛らしさこそ美の特性 (ἴδιον) である。人の心の愛らしさによってひきつけるのが美の特性である。その愛らしさを通して美は視覚に対して最も明瞭にあらわれるのである。心の腐敗せるものはこの俗界を軽視して天界の真正の美を見て、これを畏敬す

ることを知らない。ただ一身の一時的の快樂に陶醉して顧みず、下等なる動物のごとく逸樂と生殖とに耽り、放蕩をこととし、悅樂を貪りて恐るることも恥ずることもない。しかし、真實なるものは、神のごとき姿を有し、神聖なる美を表出せるものを見るときは、これに対して驚歎し、かつて天界において有せし畏敬の念が再び蘇ってくるのである。かくして、愛すべき人の姿を見ることは、あたかも崇高なる神の姿の美を見るのごとくである。美の流れは眼を通じて心のうちに流入し、その魂はそれによって沸騰泡起の状態になるのである。これによって魂は神気をおび、新鮮にされ、喜悅 (χαρμονή) がもたらされる。これが感動 (ἔμερος) なのである。¹⁵⁾

プラトンは肉体の美に対するあこがれが美のイデアを想起 (ἀνάμνησις) せしめるものであるとのべている。愛する人 (ἐρωτικός) は、その愛のゆえに、彼自身の魂に天界を飛翔する翼を得させるものであると説いている。また美を愛する人 (φιλόκαλος) は知を愛する人 (φιλόσοφος) とともに、前世において真實在を最も多く見ることのできた魂が、この世において、そのうちに宿っているところの人々であるとのべている。しかし、知を愛する人 (φιλόσοφος) は、彼の前世において眺めていた真實 (ἀλήθεια) を明瞭にこの世においても回想 (ἀνάμνησις) して眺められるのである。美を愛する人は、その美のイデアを、知を愛する人と同様に明瞭に想起することができないのである。その理由は、愛には一種の熱情が存在するからである。しかし、不明瞭であるにせよ、彼が真實性を回想し得るのは彼が美を愛するからであり、美のイデアに対して限りないあこがれ (ἔρως) を抱いているからである。かくのごとくにして、愛はむしろ不可能なものを可能にせんとする強いあこがれであり、はげしい努力 (ἐπιχείρημα) である。

美を愛する者は知を愛するもののごとくに真實在を明瞭に見ることはできないが、しかしそれだけそれに対して強いあこがれを感じて、それを追求するのである。すなわちエロースはロゴスのように明瞭性はないけれども、強力なるあこがれであり、強い欲求の力である。美のイデアは知のイデアのごとくに明晰にこの世においてその姿をあらわさないけれども、美を愛する者は、それだけ強く美に対してあこがれ、それを追求するのである。それはまた捉えんとす

る努力である。努力には苦しみが伴う。努力の苦しみは必ずしも快感とは限らない。それゆえに、美が愛によって捉えられるということは、美が快感を伴うものであるということとは合致しないことになる。^⑮

さらにパイドロス篇における美の概念の特性は、美が身体的美を通してわれわれにあらわれるということである。また美は愛されるべきものであり、われわれの愛情を最も強く惹起させずには止まないもの (*ἐρασμιώτατον*) であるとともに、最もよく見られるものであり、視覚によって捉えられるもの (*ἐκφανέστατον*) である。それがかくのごとく視覚によって最もよく見られるものとなるのは身体的美を通してあらわれるからである。美しい人間の美は、そこにおいてある精神的なるものが可視的となり得る著しい場面としてあらわれるのである。身体的美は人間の視覚の対象となり得るから、それを通じてわれわれは美のアイデアを回想するとともに、美はそれを場面としてその姿をこの世にあらわすのである。美のアイデアが特に他のアイデアと区別される特色は、それが美しい身体を通してわれわれの視覚にあらわれるからである。視覚は美の把握にとって重要な役割を果たしているのである。^⑯

(4) 美 と 生 産

ピレボス篇においては単に色や形や声の形式が美の要素として考えられたが、それらのものは視覚の対象としてのべられたのではなくして、それらのものが何らかの調和と均齊とをもつ限りにおいての美の性格をおびてくることが論じられている。しかしこれらの色、形、声は感覚的なるものではなく、尺度で測られるべきもの、考えられるべきものである。それらはメトロンのものである。パイドロスの美は可視的なものであり、視覚が美のアイデアを現象せしめるところの場をなしているのである。天界の美のアイデアを現象界に顕現せしめる手がかりを形づくるものなのである。視覚によって得られるものは単なる快感ではなく、美の具象的な姿である。美のアイデアが視覚を通じて身体美にまで具象化するのである。美はこの可視性 (*ὄψις*) によって美そのものの特性を明らかにするのである。しかして、美の可視性について、一方において、美のアイデアの想起の考えがあり、他方において、美のアイデアを通じて美のアイデア以外の他

のアイデアを想起するという考えが含まれている。すなわち、その可視性はアイデアの一つである美のアイデアのみの想起にとどまらずして、他のすべてのアイデアの想起に導くものである。

この思想はシムポジオンのうちにもあらわれている。もし人がこの地上の美しいものから出発して、かの最高美に向っていよいよ高く昇りゆくこと、あたかも梯子を昇るがごとくにして、一つの美しい肉体から美のアイデアへ、美わしい精神へ、美わしい知識へと進みゆくものである。肉体の美は他の種々のより高い、美しいもののアイデアに到達する階段であり、手段であるにすぎない。それと同時に、肉体の美による美のアイデアの想起は他の種々なるアイデアの想起の一手段であるにすぎない。¹⁸

美のアイデアそのものは超越界のものであり、それは一つの理念であるが、それが具体的にわれわれの世界にあらわれ、美しいものとしてわれわれによって視られ得るのは、ひとえに肉体美を通してである。表現のない美は単に美なるあるものであって、あるものの美ではない。イデア的な美は形体または身体において、あるいはそれを通して、はじめて、具体的なる美となり得るのである。それは単に美を観照するものに可能なるものではなく、美を愛するものにして可能なるものである。美は視られるのみでなく、視ることによって形づくられねばならないのである。愛の世界においては、視ることがつくることとなるのである。美は単に享楽されるものではなくして、愛されるものである。美は愛であり、愛において美なるものを形成するのである。

愛とは美しいもののうちに生産することである。生産は美しいもののうちにおいて行われるもので、美しいものは愛の場所である。美は生産の場所であるということが出来る。美のアイデアが美しい形体となるのは、自己における自己の生産にほかならないのである。美が愛として捉えられることは、生産作用としてはたらくことである。しかし、美のアイデアは具体的な美の形態にとどまるものではなく、身体美から精神美へ、精神美から知識美へと順次に愛の途を登ってゆくのである。¹⁹

(5) 美 と 善

美の概念は善の概念に従属せしめられているのである。美のうちにおける生産はつまりは善の所有に向うものでなければならない。美は善のアイデアに達すべき一つの段階にすぎない。プラトンにおいては、あらゆるアイデアは善のアイデアによって統轄されるのであるから、美のアイデアも善のアイデアの下に従属すべきものである。美は調和と均斉とを基準として規定されるのであるが善もまたこれらを原理としているのであるから、美とは同じ原理の上に立っている。善と美との関係をよりよく理解するために、善について考えてみる必要がある。善いということは優れた能力を有することである。この優れた能力が徳 (*διδασκαλία*) である。善きものはそのものの優れた性質のほかに、道徳的なものである。道徳的なものは、そのうちに善のアイデアが臨在 (*κατέχειν*) しているのである。善のアイデアはあらゆるアイデアの王 (*βασιλεύς*) であって、それは太陽 (*ἥλιος*) に喩えられている。それは認識の源泉として、われわれに知識 (*ἐπιστήμη*) の光を与えるものである。

かくのごとく善がわれわれの生活においてはたらいっているのがよく生きること (*εὖζειν*) である。よく生きること、適宜なること (*πρέπον*) であり、時機に適したこと (*καιρός*) であり、生活に即して善きもの (*ἐπιεικής*) である。善きものがわれわれの生活において生かされ、美しいものとなるのである。美とは形や色についてのみでなく、それにまして人間の行為についてでなければならない。人間にとっては、人間ほど美しいものはない。また人間にとっては生きることほど貴いものはないのであるが、生きることだけがわれわれにとって貴いのではなく、よく生きること (*εὖζειν*) がわれわれにとって貴いのである。善なるものが生活においてよく生かされたときにはじめて美しさがあり、善と美とが結びつき、善にして美なるもの (*ἀγαθός καὶ καλός*) が生ずるのである。

善のアイデアは単に超越界において善のアイデアとしてとどまるのではなくして、現実において生きてはたらくところの善でなければならない。それは理想としてのアイデアではなく、生活の指導原理としての善でなければならない。それは善にして美、美にして善なるものであって、カロ・カガトス (*καλοκαγαθός*)

である。善は生きるものとして善であるのみでなく、同時に美となり得るのである。善は単に善としてではなく、善の生活においてはじめて生きた善となり、同時に美となり得るのである。善が超越的存在としての善でなく、アイデアとしての善でなく、すなわち、善がそれ自体としての善でなく、真に善なるものとして、生きた善としてあり得るためには、善の生活においてはじめて可能となり得るのである。アイデアと現象との混和結合もここにおいてはじめて実現され、知行合一が可能となる。しかして、その知行合一が美であり、美の実現でなければならない。プラトン哲学の究極の問題としていた善美一体の生活、カロー・カガトスもここにおいて実現の場を見出すのである。²⁰

(注)

- ① Walter, Geschichte der Aesthetik im Altertum, S. 168.
- ② Kafka, Sokrates, Platon und der Sokratesche Kreis, SS. 101-103.
- ③ Burnet, Greek Philosophy, I, P. 165.
- ④ Platon, Philebos, 64d.
- ⑤ Apelt, Platons Philebos, S. 152.
- ⑥ Platon, Gorgias, 497c.
- ⑦ Idem, Philebos, 11a.
- ⑧ Ibid., 60de.
- ⑨ Ibid., 65d-66c.
- ⑩ Taylor, Plato, The man and his work, PP. 408ff.
- ⑪ Barth, Die Seele in der Philosophie Platons, SS. 70ff.
- ⑫ Platon, Philebos, 51b-d.
- ⑬ Marck, Die Platonische Ideenlehre in ihren Motiven, S. 69ff.
- ⑭ Platon, Philebos, 50bc.
- ⑮ Idem, Phaedrus, 249d.
- ⑯ Windelband, Platon, S. 100ff.
- ⑰ Stoeizel, Platon, S. 73ff.
- ⑱ Platon, Symposium, 211a-c.
- ⑲ Marck, op. cit., S. 104.
- ⑳ Kinkel, Geschichte der Philosophie, S. 143.